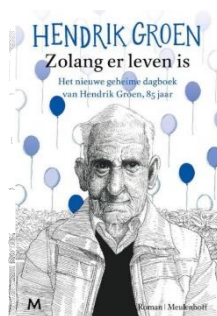


## 〈書評〉



Hendrik Groen

- *Pogingen iets van het leven te maken: Het geheime dagboek van Hendrik Groen, 83¼ jaar*; Meulenhoff, 2014
- *Zolang er leven is: Het nieuwe geheime dagboek van Hendrik Groen, 85 jaar*; Meulenhoff, 2016
- *Opgewekt naar de eindstreep: Het laatste geheime dagboek van Hendrik Groen, 90 jaar*; Meulenhoff, 2020

## 中谷 文美\*

本稿で紹介するのは、オランダで2014年から2020年にかけて出版された全3冊のシリーズ小説である。3作とも、ケアホームに暮らす後期高齢者の男性 Hendrik Groen がパソコンで綴った日記の体裁をとっている。

シリーズ1作目となる『83 1/4歳の素晴らしい日々』(原題の直訳は、「人生に意味を持たせるための試み—ヘンドリック・フルーン83歳と4分の1の秘密日記」)のみ邦訳がある。この作品は37か国語に翻訳され、オランダとベルギーでは第2作と合わせて70万部以上が売れたという。オランダではテレビシリーズになった後、舞台化もされた。オランダで出版された本を対象とするNS読者賞(NS Publieksprijs)も2度受賞している。私は今回、1作目を英語と日本語で、2作目を英語とオランダ語で、そしてまだ翻訳の出ていない3作目をオランダ語で読んでみた。

---

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科

書き手のヘンドリックは日記を書き始める決心をした時点で83歳。だが日記開始日の1行目にあるように「老人が好きではない」。互いの悪口や持病の愚痴ばかり言い合ったり、施設の生活に文句たらたらだったり、陰湿ないじめがあったり、根拠のないうわさを広めたり、といった周囲の入居者たちの態度に我慢ならず、日々の文章は抑えた筆致ながらも毒舌のオンパレードだ。入居者の動向に目を光らせ、情報公開をせず、すぎあらば管理体制を強化しようとする施設長との攻防にも情熱を傾けている。元教員で、小学校の校長を勤め上げたヘンドリックはあまり感情を表に出さず、人前で本音が言えないタイプだが、自分の内面をちょっと解放してみるつもりで率直な心情を日記に書き連ねることにしたらしい。ユーモアと皮肉の効いた文章がケアホームの日常と人間模様を克明に描いている。

第1作と第2作の舞台は、アムステルダム北地区にある7階建てのケアホームである。オランダで1960年代後半に大量に建設された老人向け施設の一つで、すでに老朽化が進んでいる。ヘンドリックが暮らすケアホームは自立した生活が営める入居者向けで、トイレとシャワー、簡易キッチンがついた24平米の個室(夫婦部屋には8平米のベッドルームが追加)が中心である。オランダの感覚だとかなり狭い。平均年齢89歳の住人たちは杖や手押し車、電動カートなどの助けを借りて(そのため、旧式のエレベーターの収容人数が少なすぎて、建物内の移動に時間がかかる)、近くの公園まで散歩したり、ちょっとした買い物に出かけたり、お互いの部屋を訪ねたりする。談話室で毎朝10時半にコーヒーが、午後3時15分には紅茶が出される。昼食は午後1時、夕食は午後6時(この日課は古き良きオランダの典型である)。入居者たちが自主的に結成した合唱、ビリヤード、老人体操のクラブがあったり、毎月1回ビンゴ大会が催されたりと一定の娯楽も用意されているが、ヘンドリックが心を寄せられる活動はない。

施設内で親しくしていたのは、入居前からの友人で、同じ敷地内の独居棟(より自由度が高く、犬などのペットも飼うことができる)に暮らすエヴァートと、かつての隣人だった施設職員のアンヤのみ。だがふとしたきっかけで、気の合う入居者とともに新たなクラブを立ち上げることになり、「年は取ったがまだ死んじゃいない」(オランダ語の Oud Maar Niet Dood の頭文字をとって、OMANIDO オマニド)クラブと命名する。月に2回程度、ユニークなエクスカッションを企画する、参加者は不平を言わない、年金の額を考慮して参加費を設定する、持ち回り幹事は当日まで企画内容を秘密にするといったルールが決められた。エクスカッションの行き先は、カジノや料理ワークショップ、動物園、太極拳レッスンなど。80代の老人8人のグループを歓迎し、必要な配慮をしてくれるよう事前の交渉も怠らない。

こうしてオマニドクラブのメンバーは、エクスカーションを通した仲間づきあいを楽しみつつも、さまざまな試練を経験する。ヘンドリックの親友エヴァートは持病の糖尿病が悪化して、片足の膝下を切断せざるを得ず、車椅子生活を余儀なくされる。明るく気立てのいいフリーチェは認知症が進行しつつあることを自覚し、その不安に耐える日々を送る。そしてヘンドリックが静かなロマンスを育てていた相手、エーフィエは突然の脳卒中により昏睡状態に陥ってしまう。結果として、このクラブは単なる楽しみの共有にとどまらず、互いを思いやり、支え合う母体となっていく。

ヘンドリックはエヴァートの飼い犬の散歩や買い物を引き受け、フリーチェの不安に付き合って認知症に対する知識を深め、看護棟に移されたエーフィエのもとに通って本を読んで聞かせる。「誰もが誰かの力になろうと全力を尽くしているのは心温まること。…フリーチェとエヴァートは必要なマントルゾルフを私たちから受け取っている」とヘンドリックは書く。

このマントルゾルフというのは、英語でインフォーマル・ケアと訳されるオランダ語の造語で、外套 (mantle) のように包み込むケア (zorg) という含意を持つ。具体的には家族や友人、近隣の住民など専門職以外の人々が提供する無償の高齢者ケアを指している。ヘンドリックはじめ、ケアホームの住人たちはすでにフォーマル・ケアを受ける側の範疇に入っているため、互いがマントルゾルフの提供者になることは想定されていない。だが、施設の中でも極力「自立」した生活を続けるため、プロの手を借りない範囲のサポートを与え合う結果になったのである。

「命ある限り—ヘンドリック・フルーン、新しい秘密日記」というタイトルの第2作は、エーフィエの死後1年ほど経ってから書き始められたことになっている。認知症が重くなったフリーチェは本人が覚悟していた通り、自由に出入りできない看護棟に移り、新入居者のレオニーがオマニドクラブの新たなメンバーとして加わった。メンバーの息子や甥に運転手を依頼するなどしながら、工夫をこらしたエクスカーションは続いている。だが彼らが暮らすケアホームの行く末に暗雲がたれこめる。高齢者介護の脱施設化に大きく舵を切ったオランダ政府の新たな政策により、ケアホームの入居基準の厳格化が打ち出された。後期高齢者の大半はぎりぎりまで在宅のまま介護サービスを受け、施設ケアがどうしても必要な状態に陥って初めてナースিংホームに受け入れられることになったのである。この場合、ナースিংホームとは24時間体制で看護・介護を必要とする高齢者向けの施設を指し、ヘンドリックの入居先にも併設されている看護棟がそれにあたる。そうした情勢の変化を受け、新規入居者が激減することになったケアホームが次々に閉鎖される中、自分たちのケアホームも閉

鎖が予定されているのではないかという疑いを抱いたオマニドクラブの主要メンバーは、入居者委員会を「乗っ取る」ことまでやってのけた。だが、施設長は明確な回答を示さない。

完結編となる第3作（原題は「最期まで機嫌よくーヘンドリック・フルーン、最後の秘密日記」）では、ヘンドリックは90歳になっている。すでにアムステルダム北地区のケアホームは閉鎖され、残っていた入居者は各地のケアホームに散り散りに移動させられていた。幸い、ヘンドリックは友人レオニーと同じホームに移ることができたが、次第に物忘れがひどくなり、アルツハイマー型認知症の診断が下りた。新たな入居先の近所には、以前のホームで一緒だった別の入居者の孫娘フリーダが住んでおり、身寄りのないヘンドリックにとっては孫のような存在となっていた。10歳のフリーダ、88歳のレオニーのほか、ヘンドリックと同じく学校教員だった経歴を持つインドネシア系の男性が彼の最晩年を支える友となる。かつてフリーチェが向き合っていたのと同じ、認知症進行への不安を抱えることになったヘンドリックは、忘備メモを住まいのいたるところに貼り付け、だんだんまとまな文章を綴れなくなってきたことを嘆きつつ、穏やかな日常を一日でも長く続けようとする。

そして日記の最終盤の記述はレオニーの手に移り、ヘンドリックがついにナーシングホーム（看護棟）に移ったことが明かされる。

自分で自分がわからなくなる状態つまり重度の認知症になることへの不安と恐怖は、この作品の全編に通底しているように思える。これは、近年のオランダで高齢者ケアを語るとき、認知症対策が問題の焦点の一つとなっていることとも関係しているだろう。そのこと自体は日本を含む他国の高齢者にも共通する問題といえるが、第1作で徐々に心身の衰えを感じ始めたヘンドリックがあの手この手で安楽死の可能性を探ろうとするあたりは、オランダならではの状況を映し出している。

周知のように、オランダは2002年4月に安楽死を合法化した。オランダの高齢化に関する概況を記したリポートでも、自らの終末期を選択したいと考える高齢者と安楽死の問題について触れている。だが実際に安楽死を望んだ場合でも、条件を満たしているかどうかについては慎重な判断が行われなければならない。家庭医が安楽死の適用の可否を判断する条件を示した2018年版の規定（Euthanaicode）によると、安楽死が認められる条件のうち「改善が見込めず耐え難い苦しみ」の具体例としては、痛みや呼吸困難、極端な倦怠、身体的衰えによる苦しみのほか、依存状態の増加や尊厳の喪失によってもたらされる苦しみがあるとされている。ヘンドリック自身は結局安楽死に向かう手立てを追求しなかったが、末期がんで苦

しんだ親友のエヴァートは、おそらく正規の手続きは経ずに、息子の協力で「安楽死協会」(Stichting De Einder: 実在する民間団体)から調達した薬により最期を迎えた。そのことを事前にヘンドリックに伝えたエヴァートは、「その時が来たとき、誰の世話にもならずにすむようにな (Hoef ik te zijner tijd niemand lastig te vallen)」と語っている。

オランダでこの作品が出版された当時、匿名の著者が本当は誰なのか (実際にケアホームで暮らす後期高齢者なのか、覆面作家なのか) をめぐって種々の憶測が飛びかったそうだが、のちに 60 代の現役作家であることが明かされた。したがってこの小説があくまでもフィクションであり、高齢者が自らの心情を吐露したものではないことはたしかだ。とはいえ、王室ネタをはじめ、いかにもオランダ的な背景やジョークを随所に仕込んだ本書がこれほど多くの国で読者を得たのは、オマニドクラブという発想の面白さに加え、人生の最晩年を生きる人々の気持ちに寄り添う以下のような文章が共感を呼んだためかもしれない。

「若いときには早く大人になりたいと思う。大人になると、60 歳くらいまでは若いまま でいたいと思う。ひどく年を取るともはやめざす目標はない。そこに、ここでの暮らし の虚しさの本質がある。めざすものがないということ。受かる必要のある試験もない、 キャリアを積む必要もない、子どもを育て上げる必要もない。我々は孫の子守をするに も年を取りすぎているのだ。

この変化に乏しい環境で、自分自身のために小さな目標を立てるのはなかなかむずかしい。まわりの人たちの目には、＜あきらめ＞しか見えない。コーヒーから紅茶まで生 き延びては、紅茶からコーヒーまで生き延びる人たちの目だ。」(第 1 作、邦訳、p 144 -145)

「ゆっくりと、なにもかもがわからなくなっていくのを止めることができない—それは 鍋の中で徐々に茹だっていくのに気づかない蛙のたとえとは異なり、長期にわたり衰え ていく自分の苦しみを自覚しているということだ。ブラックホールに落ち込むことが、 徐々に増えていく。穴から這い上がっている時間が次第にすくなくなり、たとえ這い上 がってもふたたび落ちることはわかっている。…最初は落ち着きなく失ってしまったも のを探そうとし、その後は無関心に横たわっているだけになる。手に負えなくなれば縛 られ、あらゆる尊厳が損なわれる。」(第 1 作、邦訳、p191)

注

<sup>1</sup> *The secret diary of Hendrik Groen, 83¼ years old*, translated by Hester Velmans, Michael Joseph, 2017

<sup>2</sup> 『83 1/4 歳の素晴らしき日々』長山さき訳、集英社、2018 年

<sup>3</sup> *On the bright side: The new secret diary of Hendrik Groen*, translated by Hester Velmans, Grant Central Publishing, 2020